新潟県頸城古墳群の調査

――後期古墳群の研究（1）――

中川成夫
岡本勇

一、はじめに
二、頸城古墳群の概要
三、考　察
四、頸城古墳群の特異性――結論にかえて――

一　はじめに

日本海に面し東西に長く拡がる越後国には、大別して三つの古墳稠密地帯がある。第一は弥彦山麓の西蒲原郡の地域であり、第二は南魚沼郡六日町の山麓地帯、第三がこゝにのべる上越の中頸城郡の地域である。新潟県教育委員会は、県下考古遺跡台帳作製を企画実施し、その成果報告の第一冊として、本間嘉晴、稚名仙卓両氏の努力によって、昭和三十四年に佐渡篇が刊行された。(1) 引続き県下古墳台帳を作成することとなり、その任を中川に委嘱された。中川は県教委宮栄二文化財主任らと打合せの結果、優れた研究者がおり、受入れ体制の良い上越地方より着手することとしたが、この計画の実現、実施については、この地方の考古学研究の第一人者高田商業高校教諭故小松芳男氏の献身的協力があった。

調査は頸城地方に存在する古墳をあまねく踏査し、この分布・形状・立地・出土品のすべてに亘って実測図を作り、地籍・地

目・所有者などを記録することを目的とし、昭和三十五年三・四・八・十一月に延二十日間に亘って実施した。この調査には、中川、立教大学嘱託岡本勇の他、故小松芳男・県教委主事伊藤正一、浦川原中学校教諭秦繁治・新潟大学附属高田中学校教諭青山正久・東京大学助手倉田芳郎・早稲田大学文学部副手移山荘平の諸氏が協力参加され、また地元市町村教委や区長、遺跡・出土品所有者の方々の物心両面の援助があった。これらの結果は、新潟県考古遺跡要覧Ⅱ―上越古墳篇として近刊の予定であるが、とりあえず概要の一端を発表するにあたり、共同調査の諸氏や地元の各位に厚く謝意を表する次第である。

私たちはこの拙ない一文を、この調査を推進され、成果刊行をまたずに亡くなられた故小松芳男氏、および、筆者らが学生時代より公私両面にわたって教導を受け、また大正末年以来しばしば頸城地方に足を運ばれ古墳の調査研究を指導された故後藤守一博士の御霊前に捧げ、その学恩の万分の一に酬いたいと思う。また未発表資料を快く貸与された博士未亡人、小松氏未亡人にも感謝の意を捧げるものである。

二　頸城古墳群の概要

1　既往の調査・研究

頸城地方に古墳が存在し、遺物が出土することは江戸時代に既に記録され、その収集家として、木内石亭門下に、倉石河倉亭などがあったことが知られており、また新井の人、白河治兵衛は出土品の図録を書き残している。(2) 明治の末年に入ってからは、中央の坪井正五郎博士、大野雲外氏の来越などがあり考古熱が昂まり、地元の梅山寿三郎、森成鱗造氏などの人々の手によって遺跡、遺物の探訪が行われた。この風潮は大正時代に入ると、宮田貞吉、高橋健自の両博士の来越などによって更に昂まり、高田師範学校に斎藤秀平氏が赴任し研究の指導的立場に立たれると共に、発掘が行われ、相馬御風、森成鱗造氏を中心に大正十四年には上越考古学会の結成をみるに至った。この風潮は斎藤秀平氏の高田師範学校を離任される昭和七年頃まで続いた。(3)

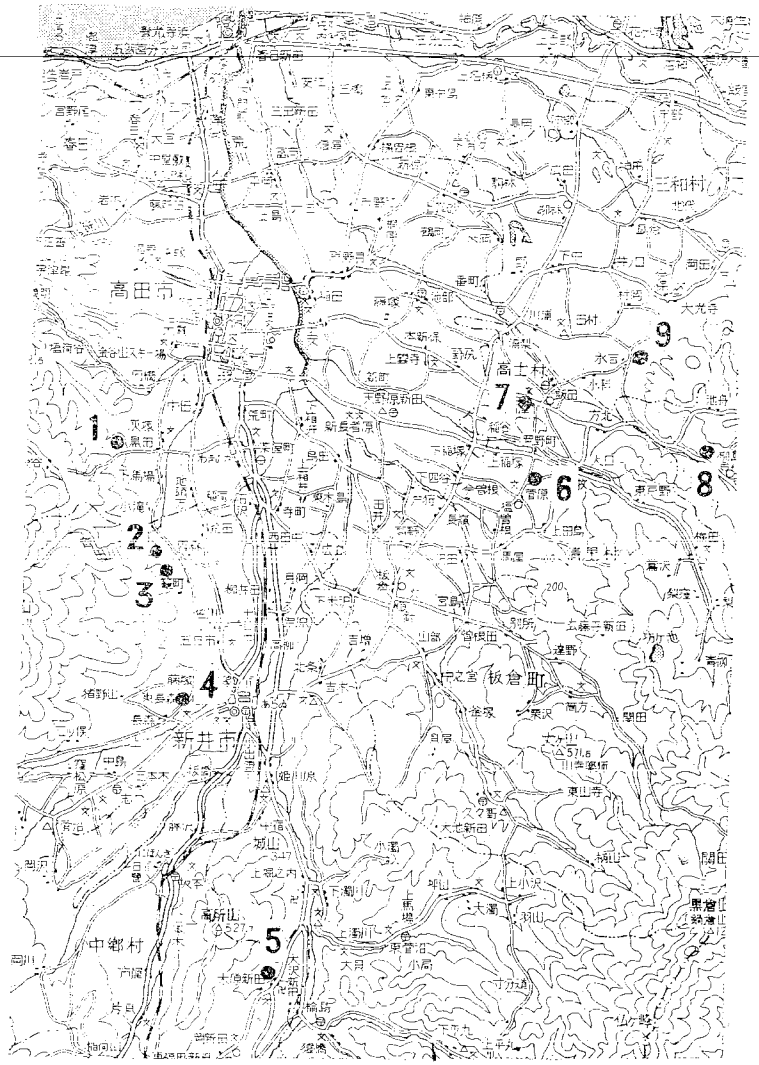
これらの風潮は卒直にいって、個人の考古癖や収集熱をみたすだけの傾向が強く、調査記録にはあまり重点がおかれなかったが、新井市裴太古墳群における岩沢良作氏、菅原古墳群における梅山寿三郎氏、宮口古墳群における小松芳春氏の記録化の業績は、学史的に高く評価されるべきものであり、斎藤秀平氏の一連の労作はこれら諸氏の記録の集大成である。また、頸城地方全般に亘っての白銀賢瑞氏の概観、後藤守一博士の中央学界への紹介論文も看過しえぬものである。(4)

戦後全国的に古墳の破壊盗掘が行われるようになったが、小松氏は父君小松芳春氏の遺志をついで、保存・記録化に努力され、幾つかの論文を発表され、調査を行われた。(5)

2　数・分布、および立地

われわれの調査の結果、古墳群と認めたものの概要は第1表に表示した。

先ず数では、われわれの調査が短期間であった上に、発掘調



第1図　頸城古墳群分布図

① 黒田古墳群　② 観音平古墳群　③ 天神堂古墳群
④ 小丸山古墳群　⑤ 原通古墳群　⑥ 菅原古墳群
⑦ 高士古墳群　⑧ 宮口古墳群　⑨ 水吉古墳群

査を伴わなかったため、誤認、あるいは不確実のものも含まれている恐れはあり、また、現在墳形を失ったものをも数に含めているので、絶対的数値を示すものでは勿論ないが、所論を進める上での相対的な数値としては誤りないものと確信する。右のほか、小松芳春氏らによって、西頸城郡青海町に横穴、糸魚川市一宮付近に円墳があったことが記録されている。事実とすれば裏日本における横穴の北限を示す資料といえよう。これらは今日破壊されているので確認することが出来なかった。また、高田北城高校教諭加藤義知氏によって、明治村大浦、新井市上中、妙高山麓、高田市南本町などにも、前方後円墳を含む古墳群の所在が報告されているが、われわれの踏査ではすべて誤認であった。これについて既に小松氏の批判があるので再言しない。[6]

第1表　頸城古墳群分布表

	所在	総計	外形 円	外形 方	外形 前方後円	外形 周濠	内部 石室	内部 無石室	遺物
1	高田市黒田	八	○	○		○		○	○
2	新井市斐太観音平	二九	○	○				○	
3	〃 〃 天神堂	九一	○	○		○	○	○	○
4	〃 〃 小丸山	一六	○				○		○
5	〃 原通	二八	○	○	○				
6	清里村菅原	三一	○		○	○			○
7	高士村塚田	一	○				○		○
8	牧村宮口	七	○				○		○
9	三和村水吉	一	○				○		○

頸城古墳群の分布は地理的にみて四地域に分ちうる。即ち、

（A）矢代川流域――黒田、観音平、天神堂、小丸山古墳群、一四四基

（B）関川流域――原通古墳群、二八基

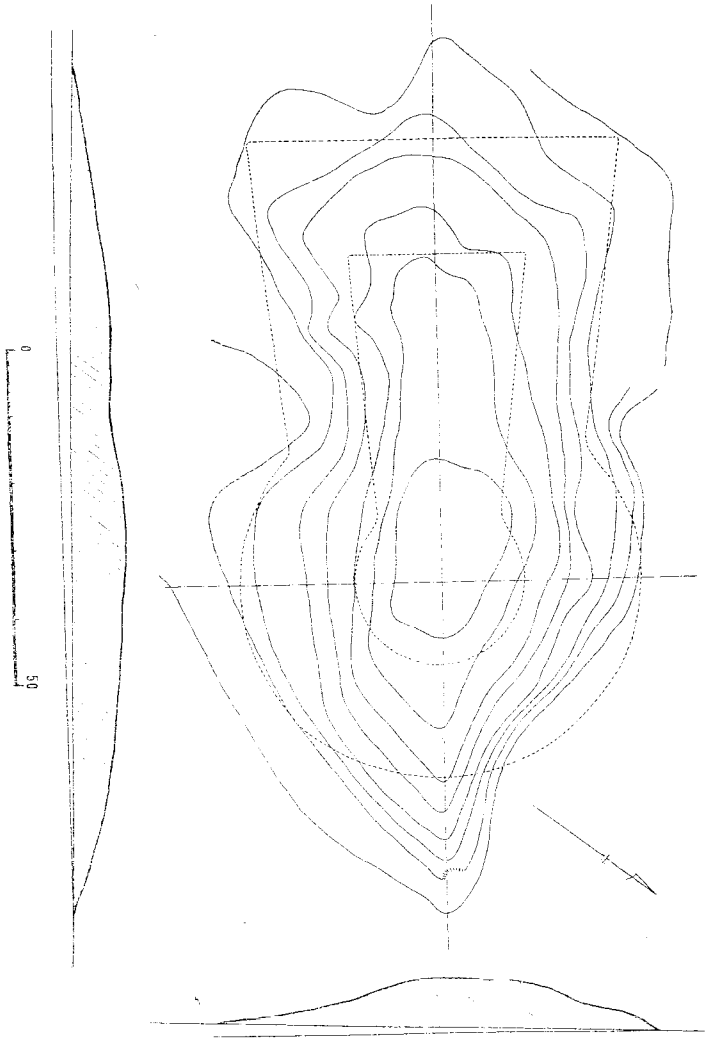
（C）櫛池川流域――菅原古墳群、三一基

（D）飯田川流域――高士・宮口・水吉古墳群、九基

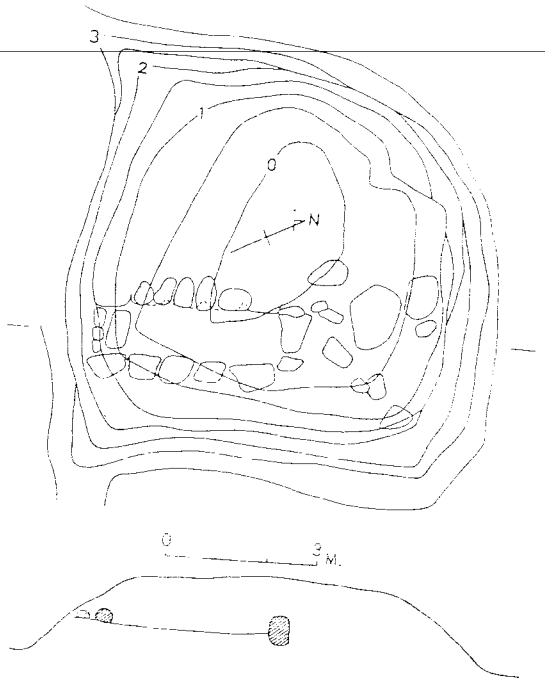
計二一四基となる。数において最大の(A)は、自然堤防上に営まれた小丸山古墳群を除き、すべて妙高山系の山麓と矢代川扇状地が接する、地形学的に傾斜変換地帯と呼ばれる斜面上に営まれ、信濃に通ずる北国街道沿いにある。(B)は県下最大の前方後円墳一基を含み、関川の支流の土路川と長沢川が合流して作る谷口扇状地に臨む丘陵上に点在し、信州に抜ける飯山街道に沿っている。この古墳群の存在は、昭和六年森成鱗造・小松芳春氏らによって発見され、昭和二十四年、後藤守一博士によって大塚が実測されて前方後円墳であることが確認され、次いで二十七年、斎藤忠博士の実査を経て、県史跡に指定されたのであるが、われわれは著しい変形やこれまで出土品が知られていない点などから、やゝ疑問を残している。(C)は荒川の支流櫛池川の作る谷口扇状地に臨む

観音平古墳群

第 2 図　観音平古墳群分布図



第 3 図　大塚前方後円墳実測図（後藤守一博士による）



第 4 図　高士村塚田 1 号墳実測図
（桜井清彦氏による）

頸城古墳群は前述のように分布上九群に分ちうるが、これらは後で詳述するが、大部分は編年的には後期古墳に属するものである。後期古墳の研究は、末永雅雄博士の指導される後期古墳研究会が精力的な調査・研究を行っておられる。[7] いま、それらの研究の助けをかりて、頸城古墳群の群としての在り方を分類してみると次のように分ちうる。

（A）　一基の前方後円墳と円墳群よりなるもの
——原通・菅原古墳群

（B）　大形の円・方墳が盟主的に存在するもの
——天神堂古墳群

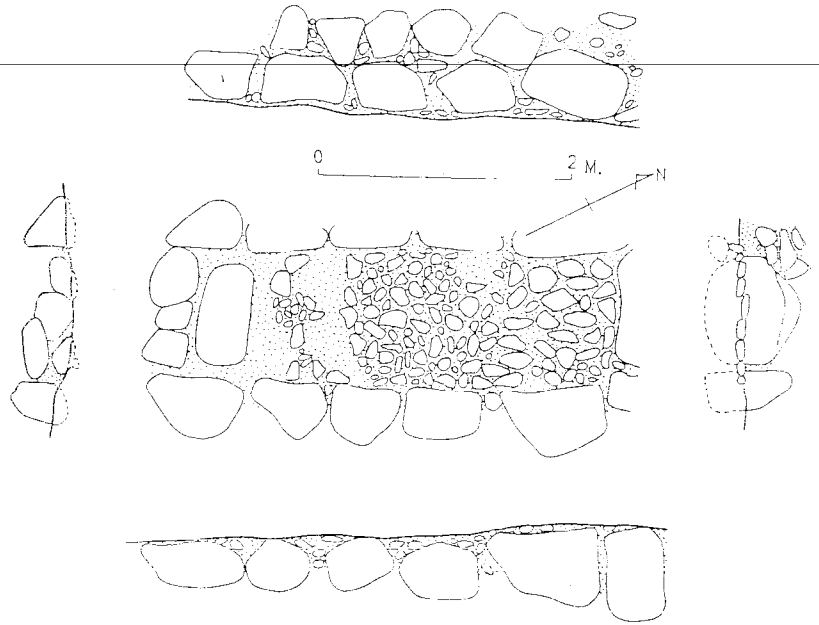
（C）　ほゞ同大の円墳・方墳で構成されるもの
——黒田・小丸山・高士・宮口・水吉古墳群

右の分類は全面的にみて、必ずしも時間の先後を意味するものではないが、頸城地方においては、発掘調査を経ぬので確言は出来ないが、編年の順を示すものと推測できる。

古墳外形についてみると、大部分は、直径・高さは不揃いではあるが円墳である。個々の実測を行っていないので断定はできないが、方形を呈するものが、関川流域のものの内に二、三認められた。これらが本来の形であったか、後世の変形であるか、あるいは古墳時代以降のものであるかは発掘によって将来明らかにされるであろう。これらの内に混って、前方後円墳が丘陵上にあり、一基の石室の蓋石が露出した前方後円墳を含んでいる。（D）は頸城山系の傾斜変換地帯にあり、飯田川の扇状地に臨む斜面に営まれ、（C）と同じく牧峠を経て信州に通する魚沼往還に沿っている。

これらの古墳群はいずれも眼下に沖積平地を臨む位置に営まれ、かつ古来の交通路に沿う地域に在るが、これらは、当時の耕地、集落の立地を自から示していると思われる。

3　群の形態と古墳の外形



第 5 図　塚田 1 号墳石室実測図（同前）

原通・菅原古墳群中にそれぞれ一基づつ存在する。原通の大塚古墳は主軸一二〇米に及ぶ大形のものである。越後には前方後円墳は他に西蒲原郡の菖蒲塚があるのみで、三基のうち二基までが頸城地方に存在することは注目すべき現象である。

4　内部構造と出土品

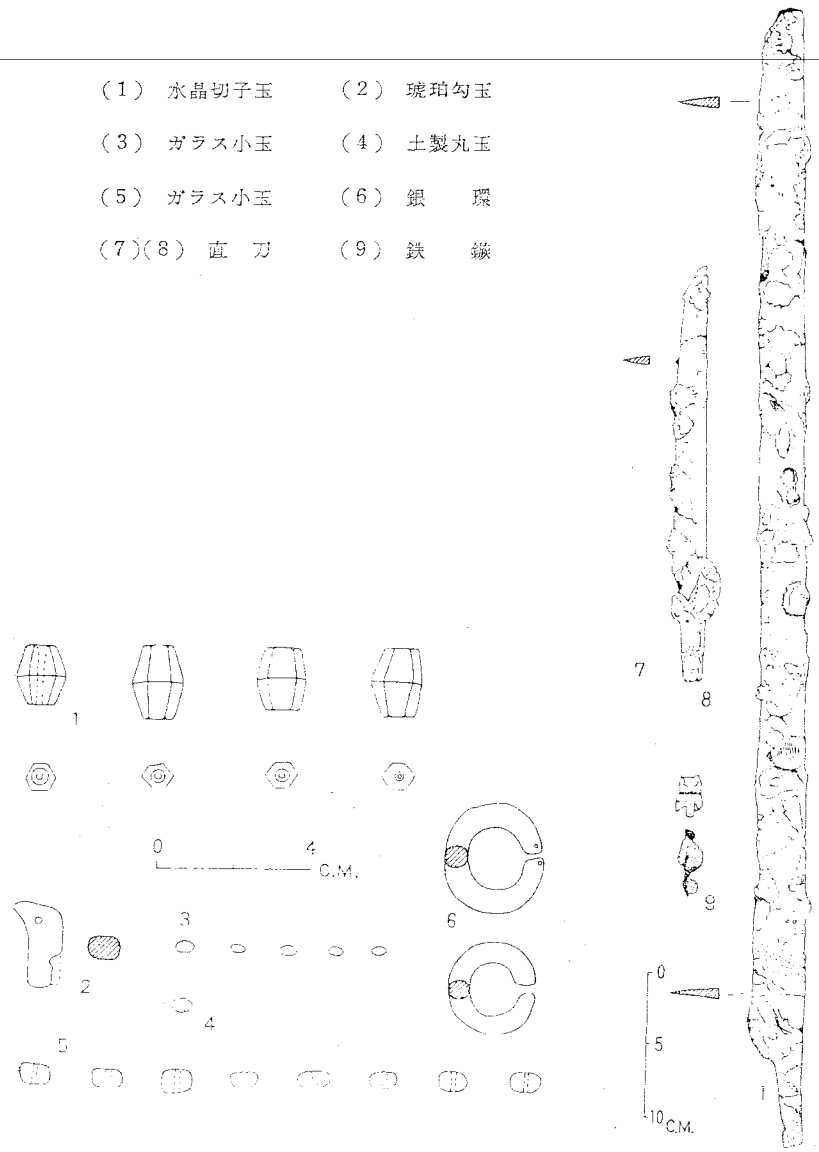
内部構造は石室の有無によって二形式に分ちうる。

（A）　石室を有するもの

これまでの発掘例によると、天神堂、小丸山、菅原、高士、宮口、水吉の各群にみられる。いずれも横穴式石室を模した、長さの割に高さの低い竪穴式石室である。この形式の石室は、東日本の末期古墳に往々にみられるが、県内では南魚沼郡余川古墳群の石室がこの形式をとっている。[8] 小松芳男氏はこの形式をとった理由を積雪の重量を顧慮して空隙部を少なくし、倒壊を防ぐためであるとの考えをのべられたことがある。また、石室内に更に小石室を設け副葬品を納めた例が、菅原古墳群で報告されているが、[9] これも東日本の末期の古墳中に類例を見出しうる。

石室をもつ古墳は、比較的低い丘陵にあるもの、また同一古墳群中にあっては低い位置にあるものが多い。これは石材を運び易いもののみに石室を作ったためかも知れない。

（B）　石室を有しないもの



第6図　遺物実測図（塚田1号墳出土）（同前）

単に木炭床、粘土床と思われる部分より遺物が出土した例が、黒田・天神堂などで報告されている。これらがすべて古墳時代の墳墓であったか否か疑問も存するが、後者の類例は南魚沼郡浦佐古墳群中に存在する。[10] 外部施設として周溝を往々もつが埴輪の類は全くない。

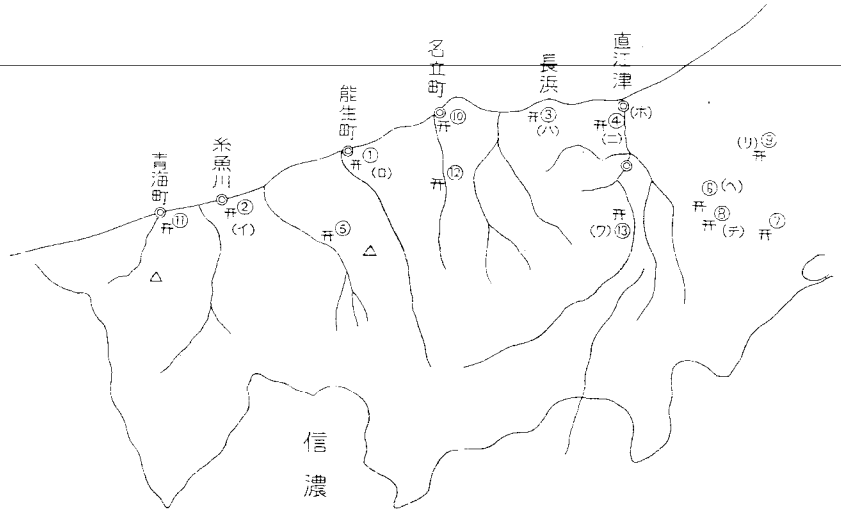
次に既往の出土品についてみると、直刀・刀子・鉄鏃などの武器類、馬具・金環・玉・仿製鏡などの装身具、および土師器などであり、通例、後期古墳にみられるものである。これらの内に若干特異性をもつものがある。好例として小松氏がのべられた瀝青土製の小玉を挙げることができる。燃ゆる水を献じた記事で知られる石油産地のこの地方で、副産物の利用が古墳時代から行われていたことを示すものである。セットとして副葬品をみると、他地方に比べて須恵器が意外に少ないことが感じられる。頸城地方の窯址群の存在は、明治村末野、高田市金谷などで知られているが、まだその調査は行われていない。われわれがかって調査した古志、蒲原地方の窯址群は、すべて実年代は平安時代のものであった点などから、越後における窯業の開始が遅れていたための現象かも知れない。[11] 玉類の中に琥珀製のものが菅原、高士古墳群にそれぞれ一例づつみられるが、古墳時代の裏日本では稀少な例である。

三　考　察

1　年代と営造者

頸城古墳群が古墳編年上、いわゆる後期古墳群の範疇に入るものであることは、彼上の遺跡、遺物からみて、何人も異論のないところであろう。後期古墳は後藤守一博士の説に従うならば、年代は大よそ六・七世紀に属するものであるが、頸城古墳群の場合は如何であろうか。

まず、前方後円墳についてみると、原通古墳群の大塚は、内部構造も不明であり、外形が崩れてはいるが、後藤博士の復原によれば、博士のいう「瓢塚式」に属し、五・六世紀頃に行われたものである。[12] 越後において大塚に次ぐ規模をもつ前方後円墳は西蒲原郡の菖蒲塚であるが、この古墳から倣製鼉龍鏡を出土したことが「北越奇談」に記されている。この鏡は戦後再び世に出たが鏡の編年上、六世紀頃のものと推定される。前方後円墳は大和朝廷勢力の伸張を示す一指標として把握されており、その圏内に建置された国の統治者である国造の墳墓が、前方後円墳に比定される公算が大であることが、大場磐雄博士、斎藤忠博士によって説かれている。[13] 旧事本紀巻十国造本紀によれば、崇神朝に後の越後の北には、高志深江、久比岐の二国がおかれた。前者は蒲原弥彦附近、後者は頸城郡に比定されこの国造の墓処は両博士の説に従うならば、菖蒲塚を含む蒲原古墳群と大塚を含む原通古墳群に比定できよう。しかして建置を等しくするという文献記事、および前者より出土した鏡の年代から、原通古墳群成立の上限を六世紀初頭に求めたいと思う。前にものべたように、頸城古墳群はすべて、信州に通ずる交通路の近くに営まれ、殊に古いと思われる原通古墳群は峠を越えれば、千曲川流域の善光寺平に達する。この流域には、信濃においても



第7図　頸城式内社分布図

数字は宮栄二氏、仮名は筆者の推定位置

①奴奈川神社（白山神社）　②大神社（天津神社）　③阿比多神社　④居多神社
⑤佐多神社（剣神社）　⑥物部神社　⑦水島磯部神社　⑧菅原神社　⑨五十君神社
⑩江野神社　⑪青野神社　⑫円田神社　⑬斐太神社（神名帳記載順）

比較的古い五世紀頃と推定される古墳が存在しているが、頸城地方は先行する縄文、弥生時代以来、中部山岳地帯に通ずる特徴を示している点などからも、古墳群の成立は信濃古墳文化波及の現象として把握すべきであろう。[14] これらの古墳は全国的に大化改新の頃、すなわち七世紀にはほゞ消滅したといわれる。頸城古墳群も、東北地方のように和銅開珎の副葬がない点などから、多少のおくれはあっても、七世紀をもってその下限としたとみられる。

これら古墳群を残した人達が、この地方の豪族であったことは常識的に考えられる。頸城地方には、旧事本紀にみえる物部氏の一族が繁栄していたことが、後述する延喜式に見える郷、式内社などによって推察でき、斎藤秀平氏らはその墳墓に菅原・宮目古墳群などを比定されている。しかし、現に頸城地方に残る数百基の古墳がすべて古文献上にみえる氏族の所産であるか否かはもとより疑問である。われわれは今後、このような古墳群の形態を更に追求することによって、その社会がいかなる形の共同体であったか、またどのような支配形態がこのような古墳群を形成したかを解明する方向へ進むべきである。

2　古墳群と郷、および式内社

古墳群の所在する地域と、後に延喜式神名帳に載せられた神社の所在、および和名類聚鈔にみえる郷

とが一致する例がよく知られている。頸城地方ではどうであろうか。越後国は統日本紀によれば、大宝二年越中国の四部を割いて置いたという。国府は現在の直江津付近におかれ、その跡は今は沖合はるかの海中に没しているといゝ、奈良時代に建てられた国分寺も同様の運命に遭ったという。また、筆者は確認していないが、新潟大学須藤賢教授によれば、旧皇五十公野村水吉付近に条里制遺構が見られるという。[15] こゝには法花寺と称する大字があるが、吉田東伍博士は、その名著、「大日本地名辞書」の中で、延喜式二十六諸国出挙正税公廨雑稲の条に、「天平十七年、越後国正税公廨各卅三万束、国分寺料二万束、京法華寺領一万八千四百四十五束……」とみえることから、大字法花寺が京法華寺の遺址であり、国分尼寺にあたるのではあるまいかとの疑問を提出されている。小松芳春氏はこの考えを支持し、遺跡の調査に熱心にたずさわられたが、われわれの踏査では寺院址と思われる積極的証拠は認められていない。また京法華寺が頸城地方、または越後の寺院を指しているか否かも定かではない。

さて、倭名類聚鈔七、越後国には、頸城、三島、魚沼、古志、蒲原、蒲船、沼垂の七郡があり、頸城郡には、1沼川、2都宇、3栗原、4原木、5板倉、6高津、7物部、8五公、9夷守、10佐味の十郷あったことを記している。白銀暋瑞氏は「頸城順礼」の内では、1は西頸城郡内、2は直江津市郷津、3は高田市和田、4は新井市付近、5は板倉町、6は三和村高津、7は清里村武士、8は三和村五十公野、9は高田市美守、10は直江津市下美守の附近と推定され、記載の順は西頸城より関川を遡り、板倉で対岸に渡っているとのべられている。この推定地の内に古墳群を含むのは、3、4、6、7、8で、中頸城地方ではその半ばが重複しているが、古墳相互との関係の研究によって、将来地域開発の前後を決めることも可能になるかも知れない。

次に式内社についてみると、延喜式には、越後国五十六座の内、頸城郡に十三座を記している。即ち(イ)奴奈川、(ロ)大神、(ハ)阿比多、(ニ)居多、(ホ)佐多、(ヘ)物部、(ト)水島磯部、(チ)菅原、(リ)五十君、(ヌ)江野、(ル)青海、(オ)円田、(ワ)斐太の諸神社である。これらの位置については江戸時代以来諸説があり、位置の移動、後世の社名仮記もあり、必ずしも一致しない。[16] 最近における宮栄二氏の研究によれば、第7図の如くである。われわれは、郡名や郷名において、その記載がある一定の順、即ち西より順をおうが如く記されているのを見ると、神社もほゞこれと同じ順序で記されたのではないかと考える。この推定が許されるならば、宮氏の推定には若干の疑問がある。いまこの論拠を詳述する紙数はないが、結論のみのべるならば、(イ)は「越後野志」の推定する、糸魚川市一宮の天津神社、(ロ)は、同じく「野志」のいう西頸城郡能生町森本の大神社、(ハ)は直江津市谷浜の阿比多神社、(ニ)は直江津市五智の居多神社、(ホ)は白銀暋瑞氏のあてる直江津市八千浦夷浜の佐々野宮、(ヘ)は清里村武士の物部神社、(ト)は？（新井市櫛池の水島磯部神社か）、(チ)は清里村菅原の菅原神社、(リ)は白銀氏の

第2表　頸城郷・式内社・古墳群関連表

郷名	式内社	古墳群
沼川	奴奈川・大神	糸魚川市一宮
都宇	阿比多・居多	
栗原	斐太	黒田・観音平・天神堂 小丸山
原木		原通
板倉		
高津		高士
物部	物部・菅原	菅原
五公	五十君	宮口・水吉
夷守		
佐味	佐多	

推定する牧村宮口の三島神社、(ヌ)は？（「越後野志」にひく妙高山の山足の社川の付近か）、(ル)は？（新井市櫛池青柳の青海神社か）、(オ)は？（「越後式内神社考証」にひく「去高田南四里」の、付近か）、(ワ)は新井市斐太の斐太神社などにあてるとすれば、郡、郷名と同じく西より順次関川を上下する位置にあることになる。

これらと古墳群との関係を表示すると、第2表の如くとなる。これを分析すると、都宇郷に古墳をみないのは、海岸線の変化による崩壊によるものかとも考えられるし、所在縦間の水島磯部・江野・青海・円田の諸神社も、これら関川流域の諸郷の内に求められるのではあるまいか。推測をたくましくすれば江野・青海・円田神社は原木郷に、水島磯部神社は板倉・高津郷の中にあったのではあるまいか。これらは今後の精査と、他地域との比較研究によって更に考証をすすめたい。

四　頸城古墳群の特異性—結論にかえて—

われわれの調査は、考古学の基本的研究方法である発掘調査を伴わず、また時間的にも短かい調査であり、目的はあくまでも文化財保護行政上必要である台帳を作ることにあったため、学術的資料としての価値は紙上の結果より薄弱であることは卒直に認めるものである。われわれは明年度以降、このそれぞれの古墳群中の幾つかを選び、発掘調査、或は盗掘墳の清掃を行って基礎的資料をつみ重ね、性格解明に努力したいと思っている。こゝではこれまでにのべたいくつかの要点をまとめ、結論にかえたいと思う。

1　上越地方では、荒川、関川の流域、即ち頸城平野の傾斜変換地帯の斜面に古墳群が集中し、一部姫川河口の糸魚川市付近に点在する。

2　これらの古墳群はすべて六世紀以降の後期の群集墳で、久比岐国造本貫の地に営まれたと推定され、およそ三つの型態に分けられる。即ち(A)前方後円一基を含む型、(B)主墳的な大型円墳をもつ型、(C)同形の円墳のみよりなる型などである。

3　内部構造は斜面の平地よりになるに従って石室が多くなり、

その石室は横穴式石室を模した竪穴式石室である。これが物理的理由を考慮したものか否か問題がある。

4　特殊な遺物として、瀝青土製小玉があり、手近の天然資源の利用例として珍しく、また逆の例として裏日本では少ない琥珀製裏玉が出土している。

5　頸城古墳文化の流入径路は、距離・交通路・年代・歴史的条件などから信濃に求めうべく、善光寺平よりの伸展とみなしたい。西の北陸地方からの影響は、横穴が姫川以東に及ばない点などから、古墳時代頃には弱かったと思われる。これが地理的条件によるか、政治的条件によるかは将来考うべき問題である。また、古墳の群としての三つの型が共同体のいずれの型の反映であるかも研究すべき課題であろう。

6　延喜式、倭名鈔などの文献は、越後の郷、神社名をほゞ西より順に記し、頸城郡では現在の関川を上下して記している。これは関川以東の刈羽郡に連なる平野が形成されていなかったことを示すものであるが、その比定される地域に古墳群が在る例が半以上である。このようなことから、逆に未決定のそれを古墳群の所在などによって決定出来、また神社では移転、借名を判別出来るかも知れない。

右は、甚だ考証不完分なものであるが、新潟県教委より刊行される正式報告書執筆の際は更に推敲を加えたいと思う。

註

（1）新潟県教委「新潟県考古遺跡要覧」I　昭三四

（2）清野謙次「日本人類学・考古学史」上・下　岩波書店・昭二九　の内に先覚者の紹介がある。
白河治兵衛の画く石器類図の標本は新井公民館に蔵されている。

（3）高田市「高田市史」第二巻　「文芸娯楽の普及—考古学」上越郷土研究会　昭三三「森成先生の思い出を語る」（頸城文化・8）昭三・八

（4）斉藤秀平「中頸城郡誌」第四巻　石器時代・古墳時代　昭一六
白銀賢瑞「頸城順礼」高田日報連載（昭四）
後藤守一「日本海々岸に於ける石器時代遺跡の型式」（考古学雑誌一七—一、三）昭二・一、三
後藤守一「上古時代に於ける上越地方」（考古学雑誌二〇—九）昭五・九

（5）小松芳男「瀝青土製玉類について」（頸城文化・2）昭和二七・一一
小松芳男「頸城の古墳時代私考」（頸城文化・8）昭三〇・一二
小松芳男ほか「新潟県高士村塚田第一号墳調査報告」（古代・一三）昭三四・九

（6）小松芳男「『上越の古墳』を読む」（高志路・一六四）昭三〇・五

（7）古代学研究会「後期古墳の問題をめぐって」昭三五

（8）滝口宏ほか「猫谷地古墳発掘調査報告」（岩手史学研

究・9）昭二六・九
斉藤秀平「南魚沼郡余川郡集墳」（新潟県報告・三）昭七
（9）中川成夫ほか「埼玉県大里郡花園村の考古学的調査」（史苑一八―二）昭三三
（10）中川成夫「南魚沼郡浦佐遺跡調査報告」（越佐研究・二、三）昭二七
（11）中川茂夫　倉田芳郎「新津田家七本松須恵器窯址発掘報告」（越佐研究・一一）昭三二
（12）後藤守一「古墳の編年研究」（古墳とその時代一）古代史談話会・昭三三
（13）大場磐雄「日本古文化序説」明世堂　昭一八
斉藤　忠「国造に関する考古学上よりの一試論」（古墳とその時代二）古代史談話会　昭三三
（14）信濃史料刊行会「信濃考古綜覧」下　古墳文化　昭三四
（15）須藤　賢「日本の集落―新潟」（集落地理講座3）朝倉書店・昭三三
（16）宮　栄二「頸城式内十三社調査報告」（越佐研究九）昭三〇

付記

本稿は中川の文部省科学研究費による研究「古代越後の国における古墳群の調査・研究」の一部であるが、この研究費の交付について尽力を頂き、また、十五年の長きに亘って研究の御指導を頂いた、奈良国立文化財研究所長、日本考古学協会委員長藤田亮策先生の急逝の報に接し、直に西下し御遺骸を拝した。本県の御出身であり、本県を愛された先生への御恩の万分の一に報いるため、今後も越佐考古学研究に努力したいと思う。切に先生の御冥福を祈る次第である。

（一九六〇・一二・一六）